

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	會報諸會消息
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 171: 120-122
Issue date	1919-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6593
Right	

諸會消息欄

乘馬會 昨大正七年十月創立。會長松尾少佐、幹事永井三郎、吉原政智、柴田讓の諸君。毎月數回乘馬會を催し、一部の會員約四十五名は野砲隊練兵場、二部三部の會員三十五名は暗重隊練兵場に於てす。松尾少佐は前者、坂根大尉は後者を教導され、他に伊藤小島坂田菊地秋田西川の諸教授の加入あり。本年二月遠乘會を催し市外谷隱の觀梅を爲せり、會する者約七十名、他に縣廳警察の養氣會二十名市内有志の自來團約十名の參加ありて頗る盛大なりき。至三月平島溫泉へ遠乘をなし集る者十四五名、途上春雨到りしも亦一風流、歸途白河を渡渉せり。

相撲俱樂部大會

龍南の意氣いよ／＼旺んで永久に衰へず日一日と新しい光を帶びて思想界に体育界に新生面を開く、我五高に力を誇り肉の躍動に興味持つ者多く各々力を角し、体力以て相搏つこと多年。しかし相撲をなすがための團體なく心ある者の久しく懺む所であつた。遂に時代と氣運により一方には斯道の熱心家の努力によつて、とに相撲俱樂部なるものが建設された。龍南のために大いに喜ぶと共に我儕象たる剛毅朴訥にも何等かの新しい力を附與するものと期待する、龍南健兒諸君よ我俱樂部のために援助の勞を愛しむ勿れ、創業は難し」の語もある、發展は部員以外の熱心助力に俟つ外はない。

我俱樂部は創立尙ほ日淺く多少の困難はあつたが万難を排して五

月廿七日發會式を兼ねて相撲大會をなした。此大會は又或意味に於て三年級諸君の相撲俱樂部の豫餞會であつた。

見る者、出演するもの皆一呼一吸にも力入つて一勝一負に闘を作つて愉快な中に散會となつた、勝負の終りに部員の土俵入りがあつた、熊本の司家から借して下れた金の彩色鮮やかな化粧廻しは隆々たる肉体の美と共に當日の花であつた。終りに當日の勝負を記す。

東

西

○菊	饅頭	(青柳)	ア	ボ	焼	(西村)	○○○
○片	象	(仲野)	夷		山	(今泉)	○○○
○長	糸	瓜	(緒方)	ア	ア	腰	(龜田)
○小	倉	汁	粉	(山口)	三	年	阪
後	家	荒	シ	(益田)	姫	殺	シ
○小		羊	(友岡)	惡		狐	(辻)
○醉	海	鼠	(新居)	胡	瓜	揉	(河村)
○長	茄	子	(笠)	×	姫	小	松
○化	入	道	(中山)	石	地	藏	(桑野)
○ビ	ール	樽	(八廣)	訥		栗	(内山)
○ハ	ケ	ノ	宮	(四宮)	×	螢	
○チ	ヤ	ン	ボ	(佐藤)	シ	ヤ	ン
時		姫	(今里)	三		浦	(宗)
○親	子	井	(君島)	鯉	メ	シ	(瓦田)
○歌	劇	派	(新居)	ア	カ	メ	(鳥井)
○虎	捨	子	(朝川)	化		猫	(金子)

○食 人 鬼 (溝口) 水 牛 (來島)○○
 ○○今 西 郷 (本田) 龍 の 落 子 (景山)○
 ○○長 髮 賊 (田中) 和 寇 (宇都宮)○
 都 踊 (藏原) 黒田 武士 (竹村)○○
 三人拔優勝者 中山、宗、來島、

二葉會記事

我々は自然を愛する、かの碧空と水と地と花と風との裏に久遠の
 律呂を以て鼓動し流動してやまぬ自然の生命を愛する。さうして我
 々が愛することによつて、自我の跼蹐を脱し一層大いなる自我の内
 面に觸れ、我々の全人格が萬物の輝きある一意識の中に開け行く所
 に、そこに初めて眞の自由を感じ、衷心の愉悅を覺ゆる。

二葉會も滿一年の誕生日までに兎に角第二回の展覽會を開くことが
 出來たのは嬉しい。於第二豫備教室自五月二十七日至二十九日の一
 年の間數回のスケッチ行に集つた會員は少數であつたけれ共、自然
 に對する暖な愛によつて内面的の統一を感ずる我々は、自然をさう
 して自己を稚いなりにも表現し成長せしめ、ここに深い若々しい
 歡びを感じないでは居られなかつた。嚴肅にして莊麗な暮れゆく冬
 の空をそがひに消に殘る夕陽の光を浴びて神秘な淡紫に輝く阿蘇の
 連峰を眺めやる時、或は廣茫たる託摩が原が銀色に輝く綠草に蔽は
 れて光溢る、蒼空の下を腹の白い燕がひるがへつて行くのを見る時
 我々ばかりの Klinger が Andie Schönheit に表はした人の様に思は
 ず筆を捨て衣を脱いで聖純な裸の儘に自然を跪拜し禮讃せんとする
 幾度の衝動を感じたであらう。今度の展覽會に集つた作品は數に於

て第一回より少く畫面の大きさに於てもかの時に優らなかつたけれど、
 も、輕い根底の淺い筆先の戯れから、次號に全人格的な本質的な
 ものへの努力が多かれ少かれ表はされて來たことを嬉しく思ふ。さ
 うして生ひ出でたばかりの二葉會にきざしたこの本質的なものが、不
 斷に成長を續けて次の展覽會は一層力ある創作物によつて充されん
 ことを切望する。來學期には、長江先生方があちらから持つてお歸
 りになつた版畫も皆で見せて戴くことが出來ると思つて居る。そう
 して、いさゝかなりとも我々の貴き素質「剛毅朴訥」を次第に醇化し龍
 南の精神生活をより崇高なより純真なものに近づけて行きたいと思
 ふ。來學期からの事務は一部小平君二部林君にお頼みしておいたけ
 れ共、會員が皆で懸命にこの芽生へを培つて欲しい。この小さな芽
 生も充分龍南の一隅に存在する價值を持つてゐると思ふ。我々は龍
 南を去るにあつて二葉會の爲にあの whinman の詩を残したい。

(W. T. 生)

— O the winter shall not
 freeze you, delicate leaves,
 Every year shall you bloom again— Out from where

you retired, you shall emerge again:

O I do not know whether many, passing by, will
 discover you, or inhale your faint odor—

but I believe a few will,
 O slender leaves! O blossoms of my flood! I permit
 you to tell, in your own way, of the heart
 that is under you.—

雜報

大正七年度龍南會決算計算書

收入ノ部		
通常會員會費	二五五〇〇〇〇	
新入會員入會金	二八七〇〇〇	
名譽會員會費	六六七五五〇	
預金利子	三一三一〇	
寄付金	一五、〇〇〇	
前年度繰越金	一二一八二〇	
合計	三六七二六八〇	
支出ノ部		
端艇建造積立金	三三五、〇〇〇	
基本積立金	一一、〇〇〇	
各部選手遠征旅費	三五九、一五〇	
師範謝禮	八二、三三〇	
演說部	八二、〇〇〇	
雜誌部	五五二、〇〇〇	
劍道部	一〇八、五七〇	
柔道部	一三三、〇〇〇	
弓術部	一一九、一七〇	
野球部	一八八、三〇〇	

(附記)第二回二葉會展覽會は五月廿七日より廿九日迄第二豫備教室で開催された。出品點數は總計三十點。高木教授水彩畫風景二點(一、三、乙)徳永新太郎君 油畫風景六點靜物一點。水彩畫三點(一、三、乙)池田小一郎君 油畫人物一點風景一點(二、三、甲)莊島秩男君 油畫風景六點靜物一點(一、三、乙)森加堂登君 油畫風景三點(二、二、乙)林荷君 水彩畫風景一點(一、一、乙)小平潔君 水彩畫風景三點靜物一點。(二、三、甲)岡山覺三郎君 水彩畫風景一點。佐雜武男、植松英夫、大西正之助君等の發起にて創立さる。入會者約三十名。全廿四日其の發會式を集會所にて催す、會する者十四五名

佛教青年會

四月廿五、廿六兩日釋尊降誕紀念講演會を。佛教大學講師宇野圓空氏を聘して、本校、會館、公會堂に開催す。

五月二十五日數年來の宇佐美教授の大乗起信論義記講義完結し納會を催す。

花陵會 五高基 督教青年會として活動せる同會は廿餘年前の創立にして現在會員凡六十名、毎月例會を開く。最近五月十日夜豫餞演說會をメリダスト教會にて開く。辯士は福田眞宗文生安田京雄福島鐵雄松尾喜代司梶原通好の諸君。同廿四日會館にて總會並に豫餞會を開き全夕萬日山に夕陽會を催す、後者は同會創立紀念の祈禱會也。年中行事としては他に學年始の、新入生歡迎會、十月卅一日の會館創立紀念祭等あり。